

【研究ノート】

貧困、チャヴ、負債について

金子 充

はじめに

貧困が社会構造的に生み出されているという議論は、現代ではますます理解されがたいものになっている。それは個人のふるまいの結果であり、モラルが欠如した人間の問題とされるためだ。ゆえに、貧困になる／貧困であることは倫理的な責めを負うべきことと考えられ、軽蔑、非難の対象となる。

このような倫理的な抑圧を貧者⁽¹⁾にもたらす暴力の構造を再確認することは、社会福祉の基本的な議論としてあらためて重要である。しかしそのような社会理論は流行らないし、貧困の多義性に着目すればその背景や構造を総論的に説明するには乱暴すぎることも確かだ。それゆえにますます貧困を導く諸個人のふるまい、そして諸個人のモラルに関心が集中していく。

それでも現代における貧者への抑圧がどこから、どのように導かれているのか、その含意を理論的に明らかにし、社会福祉の議論や実践にかかわる多くの人々と共有することが不可欠だろう。その手がかりとして、以下ではオーウェン・ジョーンズの『チャヴ』とデヴィッド・グレーバーの『負債論』の議論から示唆を得たいと考えた。両者は主題もアプローチもまったく異なる議論であるが、貧者が何に苦しめられているのかを構造的にとらえ、また人間の社会的な生の問題を諸個人の倫理的な生の問題へとすりかえる議論を批判的に論じている。「モラル」の言説で貧者を抑圧する社会的な暴力を考察するヒントとして整理しておきたい。

1 「チャヴヘイト」を生んだイギリス政治

イギリスでは、下層階級(underclass)の蔑称である「チャヴ(chav/chavs)」ということばがしばしばつかわれるようである。チャヴは、貧困、怠惰、粗暴、下品、低教育といった「貧困の文化」を身にまとった人間を軽蔑、非難する意図を含んだ人稱として用いられる。ホームレス、アルコール・ドラッグ依存症者、長期失業の若者、「ウェルフェア・マザー」(生活保護に「依存」するシングルマザー)、そして犯罪者(累犯者)などがチャヴの典型であるとされ、彼らは「労働者階級」の下層にいる「救いがたいクズ(an unredeemable detritus)」(Jones, 2012: 7=2017: 14)であるとされている。

オーウェン・ジョーンズの『チャヴ』(2012=2017)は、こうしたチャヴ表象の実像を解き明かし、「チャヴヘイト」(嫌悪)の構造と階級分断、そして社会政策の失敗を批判的に検討した書である。同書によると、チャヴという概念はロマ族のことばで「子ども」を指す「チャヴィ」に由来し、また「コリンズ英語辞典」には「カジュアルなスポーツウェアを着た労働者階級の若者」と紹介されているという。ダメージジーンズにパーカーを着て、偽ブランド品で身をかためて地元をフラフラさまよう、粗暴で品のない「ごろつき」というのが当初のイメージのようである(Jones, 2012=2017: 7-15)。やがて多くの人々はさまざまな下層の労働者階級に対する不快感を込めてこのことばを多用するようになり、「公営住宅に住んで暴力的(Council Housed And Violent)」といった語呂合わせが生まれるなど、貧者の「あらゆるネガティブな特徴」を込めてこのことばが使用されるようになったという(同: 15)。

興味深いことに、移民や同性愛者に対するヘイトに敏感な、教養あるリベラルな市民もこのチャヴということばの使用には無頓着であるとされる(同: 6-7)。そしてチャヴという表象が次の事態を招いているとジョーンズは説明する。

「メディアや人気のエンターテインメント、有力な政治家たちはこぞって、これらは道徳心の問題であり、是正すべき無秩序であるとわれわれを説得した。被害者に責任を押しつけることによって、ドラッグ、犯罪、反社会的行為といった社会問題の真の原因を、意図的にあいまいにした。症状と原因が混同されたのだ(同：243)。」

「労働者階級の人々を悪者扱いすることは、不合理な制度を正当化する怖ろしく合理的な手段である。そうやって彼らを敵視し、彼らの関心事を無視したうえで、いまのはなほだ不公平な富と権力の分配は、人の価値や能力を公平に反映していると正当化する。だが、その敵視には、さらに悪質な意図がある。労働者階級の特定のコミュニティをむしばむ貧困、失業、犯罪といった社会問題全般に、自己責任の原則を当てはめるという意図だ(同：229)。」

ジョーンズが同書全体にわたって強調していることは、チャヴという表象には道徳的に墮落した「救済にあたいしない人々」という含みがあり、そのような「個人的問題」を抱える人々をバッシングすることで貧困の政治責任が回避されているという点である。つまり、チャヴは貧困という状態や境遇ではなく、解決すべき「個人的な問題」に取り組むことができていない階層の個々人をとらえようとする概念であり、倫理的な責めを個人に負わせるためのことばである。そして、チャヴ表象が貧困や不平等を個人の責任の問題に追いやることで、政府の福祉政策の失敗が正当化されてきた。チャヴは貧困というポリティカルな問題を個人のモラルの議論にすり替える概念ということである。

2 チャヴ表象を利用した階級分断

ジョーンズのもうひとつの強調点は、チャヴが「階級闘争の落とし子」(同：

51)として政治的に生みだされたものであるとしている点だ。同書によれば、長らくイギリスのデモクラシーを支えてきた「労働者階級(working class)」は、1980年代以降ついに「解体」されてきた。保守派の間では、労働者階級の解体はサッチャリズムの最も優れた功績として語られているほどだという。たしかにイギリスではかつて労働者階級はひとつのアイデンティティであり、階級闘争の担い手として結束していた。しかしジョーンズによれば、サッチャー以降の政治は労働者階級をバラバラに分断していった。

サッチャーが「貧困は物質的な問題ではなく態度の問題」と名言したことは有名である(同:84)。サッチャリズムによって貧困は階級の問題ではなく個人のモラルの問題となった。犯罪も「個人の選択の問題」であるとされ、「壊れたコミュニティ」に起因する問題などではないと理解されるようになった(同:85)。同様に、薬物使用者もシングルマザーもホームレスも、個人の選択の問題であり、自己責任に帰する問題だと考えられるようになった。こうした「個人化」が労働者階級をバラバラにしていき、従来の労働者階級とチャヴは分離され、最下層とされたチャヴは軽蔑と非難の対象として敵対化されたのである。

また、労働者階級のアイデンティティを確固たるものにしていたのは、製造業(第二次産業)中心の経済であったとされる。製造業の労働者は熟練の技術を持っていて、「高い収入を得ていたし、ほとんどが労働組合に所属して、非常に誇り高く働いていた」(同:199)。その後の「ニューレイバー」(ブレア労働党政権)および市場経済のグローバル化によって「メリトクラシー」と「才能と実行力があれば誰でも成功できる」という考えが進展し、「労働者階級はチャヴというクズだけを残して衰退した」と考えられた(同:208)。

「いまやあらゆる人の人生の目標は、中流階級になることだ。サッチャリズムとニュー・レイバーは、ともにこの徹底した個人主義を、ほとんど宗教的な熱意で推進した」(同:310)という。人々もまた自らを中産階級であると自認するようになっていった。こうして「階級のない社会という幻想がすっかり定着

してしまった」のであり、その結果残った貧者はチャヴだけになったと言われるようになった(同：209)。

さらに、ニューレイバーは階級政治から「アイデンティティ政治」に目標を変えることで支持を得た。それは女性や性的・民族的マイノリティの解放のために闘う者たちを応援する政治だと理解された(同：316)。ニューレイバーはパレスチナやイラクの問題をはじめとする国際問題にも政治の焦点を移し、国内の貧困と階級の問題から目をそらそうとした(同：317-8)。階級政治をやめたニューレイバーによって富裕層の富の蓄積と製造業の崩壊が進み、やがて「シティ頼みの経済」(同：318)すなわち金融経済と国民を借金漬けにする諸政策もたらされていったという。

ジョーンズはサッチャーの興味深いエピソードを紹介している。「あなたの最大の業績は何ですか？」と訊かれたマーガレット・サッチャーは、ためらうことなく『トニー・ブレアとニュー・レイバーね。敵を変節させたのだから』と答えた」というものだ(同：312)。

チャヴという表象を拡大させた背景に労働者階級を分断するさまざまな政策の展開があったことを、同書はさらに多角的に検討している。たとえば、「タックス・クレジット」と呼ばれる社会保障給付(給付つき税額控除)が80年代以降に導入されたが、それは低い賃金を政府が容認し、むしろそれに助成金を出して企業の雇用負担を軽減するような状態をもたらした。こうした「不平等を後方から支える政策」によって社会保障の再分配機能が弱まり、不平等と貧者の社会的地位の低下が一層深刻化した(同：255)。また少ないお金をやりくりして生活する能力を持っていたはずの貧者に対して、政府は金融投資やローンを奨励する政策を持ち出し、彼らを混乱させ、借金漬けにしていった。

公営住宅の建設をストップし、「買う権利」政策という名目で借金をさせて持ち家に転居させる政策が推進された。教育政策も同じ論理であった。これらにより貧富の棲み分けが進み、公営住宅や公教育を利用する者はいっそう肩身

の狭い思いをするようになった。そして労働者階級の不満は人種差別・移民排斥に向かったのである。右派ポピュリズム(そしてブレグジット)である。

こうして誰もがみな中産階級になる向上心を持つべきだし、そのチャンスが開かれているとうそぶく政治は、そこに至れなかった者たち(=チャヴ)を軽蔑する言説を生み出す下地をつくった。一方でチャヴヘイトは、自らを下層階級ではなく中産階級だと信じる人々の暮らしを困難なものにした。中産階級を自認する人々は自らそう信じているだけで、実際のところ「労働者階級」のまま低賃金と債務に苦しめられつづけていたからである。向上心とチャンスを謳う政治は、そのような中産階級を自認する(本当は下層の)人々に豊かさをもたらさず、貧困状態に追いやっているとされている。このように、チャヴという階級があるとすれば、それは政治によって形成されてきたものだとジョーンズは強調する。

チャヴは「アンダークラス(underclass)」概念と類似した機能を持ち、貧者の「モラルリティ」を攻撃する諸々の言説の土台の上で用いられている。だがチャヴは「アンダークラス」とは異なり、もはや貧者を階級(class)としてとらえることを放棄し、不快感とともに貧者個人個人をいっそう倫理的に攻撃する目的のことばとして使用されているといえよう。

3 負債につきまとうモラル

デヴィッド・グレーバーの『負債論—貨幣と暴力の5000年』(2011=2016)は、貧者につきまとう「負債」の問題を、返済の「モラルリティ(倫理性)」への問いかけを通じて文化人類学的に考察する壮大な議論を展開している。借金を抱え、倫理的な「負い目」を感じつづける貧者の境遇をとらえるにあたって、同書は、道徳的な義務を経済的な負債にすり替え、返済というモラルティで人々を苦しめるネオリベラルな政治および国家の暴力を暴いており、示唆的である。

グレーバーの問いはこうだ。こんにち誰かが「借りた金は返さなければならない」というとき、経済的な言明とモラルの言明が混同されている (Graeber, 2011=2016: 8)。モラルを説くならば「借りを返すべき」でよいはずだが、こんにち負債は貨幣によって支払うべきという交換原理が過剰に強調されているのだ。そのため、たとえば開発途上国はIMFからの債務の返済に苦しめられ、緊縮財政によって国内は激しい貧困におちいる。個人の債務も同様で、返済に猶予はなく、負債のためにいっそうの生活苦がもたらされている。

一般に、文化人類学において「負債」は経済の問題ではなく宗教上の義務や正義にかかわる問題として考えられてきた。すなわち「負い目」ということである。負い目は貨幣で返済できるものではないはずだったが、近代になって負債の意味は変質していき、こんにち負債は経済的に計量、把握され、すなわち貨幣換算されて理解されるものとなっている (同: 22-32)。

グレーバーは文化人類学を再解釈することで、負債がそもそも必ずしも交換原理にもとづく経済ではなく、義務や正義による人間関係を成り立たせてきたものだと強調する。人類の歴史において、負債とは「負い目」であり、誰かに対する「借り」を意味していた。たとえば多様な民族の婚姻制度についての人類学的研究では、人類が花嫁を人質として差し出すことで、「貸し借り」による関係(互酬)で成り立つコミュニティもしくはヒエラルキーを維持するしくみを発展させてきたことを説明する。このとき花嫁の命は唯一のものあり、金で代替できるものではない。したがって花嫁をもらった側はどれだけの返礼(花嫁代価)をしても彼女の命と等価のものを見返りに差し出すことはできない。ゆえにグレーバーの理解はこうである。

「実のところそれ [花嫁代価] は、どのような支払いも不可能なほどかけがえのない価値あるものを要求していることの承認なのだ。(中略) 人ができることといえば、ただ、その未払いの負債を認知することだけなので

ある(同：201)。」

「通貨は負債を清算するためではなく、通貨によっては精算不可能である負債の存在を承認するために贈られる。しばしば双方は、いつの日か現物による返礼があるだろうことを少なくとも儀礼的なフィクションとして維持しようとする(同：203)。」

こうした相互関係が負債の本質であるという。同書は婚姻にかぎらない人類史上のさまざまな負債によって、人間同士が人格的で道徳的な義務による関係を形成してきたことを論じている。人類史を確認するかぎり、人間の関係性を確認するために経済や貨幣が用いられてきた事実があるという理解だ。この義務による関係性を媒介するものがまさに負債であったとされている。

4 負債の貨幣化を進める暴力

しかしグレーバーは、負債による関係性には暴力がともなうことをあわせて指摘する。負債が返済されていないあいだには「ヒエラルキーの論理」が支配的になるのであって、必ずしも互酬性が存在するわけではないということだ(同：182)。たとえば刑務所に収監された犯罪者は社会に対して負債(借り)があり、それを返すために刑を受ける。そのとき刑務所は互酬ではなく「支配」によって基礎づけられている。「かくして負債とは完遂にいたらぬ交換にすぎないのである」(同：183)。多くの文化人類学の見方とは異なり、互酬に至らない負債の関係性をとらえ、その暴力性をとらえるところに同書のオリジナリティがある。

そして、「花嫁代価」のような道徳的な義務としての負債を経済的な等価交換で計量される負債にすり替えていったのが貨幣であった(これを「負債の貨

幣化」と呼ぶ)。もちろん貨幣は近代になって発明されたものではないが、当初の「原始貨幣」は「負債を支払うことは不可能であるという事実の承認」(同：241)のために用いられるツールにすぎなかったという。つまり貨幣は長らく交換の手段というよりも「人間経済」のなかで信用を維持するもの、名誉のためのものであった(同：312-7)。

その後貨幣経済の拡大によって負債は経済的に計量、把握されることになり、花嫁の命の重さは「どうでもよい問題」になった。貸し手がどういう人間なのか、借り手の人生がどうなるかは関係ないことになり、そして「数字」のみが重要になったのである。人間の命よりも「数字」が重要になったのだ。こうして負債は貨幣によってきっちり計量されて返済することのみをもって倫理的だと考えられるようになる。そのことは、逆にいえば、貨幣による返済がかなわない貧者がモラルを欠いた人間だと認知されていくということである。

「人間生活のすべてを交換に還元することは、その他すべての経済的経験(ヒエラルキーやコミュニズム)を除外してしまうだけでなく、成人男性でない者たち、つまり、日々の存在を相互利益を求め合う交換に還元することが相対的に困難な圧倒的多数の人間を、後景に溶解させてしまうことを意味する(同：194)。」

この「圧倒的多数の人間」こそが貧者である。またグレーバーがもうひとつ強調することは、負債の貨幣化には何らかの「暴力」がはたらいているという点である。人間の命と等価交換できるものはほんらいないはずだったが、暴力——たとえば征服、戦争、奴隷制度のような——が負債から人間の関係性を切り離し、経済的な交換を可能にしてきたということだ。そしてその暴力は国家によってもたらされてきた。

こんにち人間社会は「負債の貨幣化」をいっそう徹底させ、数量的に可視化

される等価交換の経済に支配されている。グレーバーの議論にもとづけば、それはつまり社会に暴力が増していることの証左である。暴力が負債の貨幣化を促しているからである。貨幣を使用することが倫理的なこととなり、また貨幣で返済することがモラルとなり、そうでない負債による義務関係——それまで社会の本質とされていた関係性、たとえば「依存」——は墮落であると考えられるようになったのだ。

5 貧者だけがモラルを問われる

ところが、数量的に可視化された交換経済のモラルを厳密に遵守させられるのは貧者ばかりである。倫理的な責めを受け、奴隷労働を強いられるのは貧者のみであって、負債の貨幣化は軍事大国やグローバル企業には適用されない。グレーバーはその実態をアメリカの国債と軍隊との関係を取りあげてこう説明する。

「合衆国の軍隊は、それ以外のどの軍隊とも異なり、グローバルな権力掌握を指針としつづけている。海外に設置されたおおよそ800の軍事基地を通し、地球上のどこへでも強靱な力で介入する力を保持するべし、なる指針である。(中略)まさにこの壮大な／宇宙規模の力こそが、ドルのまわりに組織された世界の貨幣制度を統合しているといってもいいすぎではない(同：541)。」

「合衆国の貿易赤字のために莫大な量のドルが国外で出回っている。そして(中略)海外の中央銀行には、合衆国財務省長期証券を買い上げる以外にそれらのドルの使い途はないということである。ドルが世界の『準備通貨になっている』ということの意味はまさにこれだ。これらの長期債権は、

あらゆる長期債権とおなじように、いずれ満期になり払い戻しされるであろう貸付である。だが(中略)決してそうはならないのである(同：542)。」

軍隊という暴力があるかぎり返済されないアメリカの負債が世界の貧者を苦しめているということである(「金融的フリーライド」と呼んでいる)。軍事的暴力支配を受ける沖縄を抱えつつ、国民1人当たり800万円の借金があると脅迫される債務国日本において、「負債の貨幣化」が人々をいっそう抑圧している。道徳的な義務を経済的な等価交換で計量される負債にすり替えてきたネオリベラルな政治は、貧者に対する抑圧そのものを生み出しているといえるだろう⁽²⁾。

「モラル」をもって貧者に抑圧をもたらす暴力の構造の一端を、ジョーンズとグレーバーの議論を手がかりに整理してみた。「チャヴ」にしても「負債の貨幣化」にしても、貧者だけがモラルリティを問われ、彼らを抑圧する暴力の「インモラル(非道徳性)」は無視されている。チャヴと称される貧者や債務者は、倫理的に責められることでますます人格的で道徳的な義務による関係(人間的つながり)を破壊されてしまう。その一方で、返済されない国家の債務と軍隊による暴力支配のモラルが問われることはない。こうした含意をどう考えたらよいのか、あらためて追求すべき問題であるが、一社会福祉研究者の力量を越えるテーマである⁽³⁾。

註

- (1) 「貧困状態にある人々」を表象することばには、貧困者、低所得者、生活困窮者などさまざまなあって、それぞれに定義がある。本稿ではそれらのテクニカルな定義からいったん離れるために「貧者」というあいまいなことばを使用する。
- (2) 同様に、家計管理におけるモラルを強調する生活保護や生活困窮者自立支援、そして奨学金制度(さらには軍隊への貢献を条件に若者に借金をさせる「経済的徴兵制」)など、「モラル」をもって貧者に負債の返済や交換経済への参加を迫る政策のあり方が問われることになるだろう。
- (3) 「負債の貨幣化」に抗してグレーバーが提案する具体策のひとつは「債務帳消し」

貧困、チャヴ、負債について

である。

また「わたしたちが直接かかわれること」として次の記述をしている。「じぶん自身を解放するためにわたしたちが最初になすべきこと、それは、ふたたびみずからを歴史的な行為者、世界の出来事の流りに変化をもたらすことのできる民衆とみなすことである。歴史の軍事化が剥奪しようとしているのは、まさにこれなのだから」(同：566)。

さらにあとがきでは、同書の目的について、「負債、仕事、貨幣、成長、『経済』などの理念そのものについて、広範なモラル上の視座から再考することにささやかながら本書が貢献できれば」と記しており(同：587)、「広範なモラル」を容認しない現代社会への不快感をもとに、次代の社会の創造に向けた議論をはじめなければならないとしている。

文献

- Graeber, D. (2011) *Debt: The First 5000 Years*, Melville House(デヴィッド・グレイバー著、酒井隆史・高祖岩三郎・佐々木夏子訳(2016)『負債論 一貨幣と暴力の5000年』以来社).
- Jones, O. (2012) *Chavs: The Demonization of the Working Class*, Verso Books(オーウェン・ジョーンズ著、依田卓巳訳(2017)『チャヴ 一弱者を敵視する社会』海と月社).